アメリカ通勤事情

筆者は最近，グループの共同作業場で仕事をすることが多い．筆者が9時頃に出社すると，同僚のAlexはいつも席に座っていて，ひと仕事終えたような顔をしている．彼は朝7時前には出勤し，夕方4時前には帰宅するのである．たとえミーティングで熱弁を振るっている最中でも，4時になると突然帰ってしまう．なぜ彼がこういうシフト勤務をしているかというと，住んでいる場所に原因がある．Alexの自宅のあるヘイワードは会社のあるパロアルトからおよそ30マイル．自動車で通勤する距離としてはそれほど遠くはない．しかしサンフランシスコ湾の対岸にあるので橋を渡らなければならない．ここが通勤時間になると大渋滞になる．そこで彼が選んだのは渋滞の前に橋を渡ること，つまり朝7時には会社に着くようにして，夕方4時前に帰宅するという通勤スタイルであった．ではなぜそんなところに住んでいるのかというと，農家で暮らすのが夢であったそうだ．結婚を機にヘイワードの農家を買い，作物を育て，鶏や山羊，馬を育てるという生活を楽しんでいる．時折自宅で問題が生じると，会社に出てくるのを諦めて自宅で仕事をする．朝Alexがいないと思ったら「今日は自宅で働いてるよ」というメールが届いている．彼のPCのディスプレイを見るとマウスが動いており，自宅からVPN（Virtual Private Network）で入っているのが分かる．メールやインスタントメッセージで通信できるし，いざとなれば電話で話ができるので特に問題は生じない．この程度のことで「奴はわがままだ」などと言っていては，シリコンバレーのエンジニアとは付き合えない．

隣の部署のBradはゴルフ場で有名なペブルビーチに住んでいる．パロアルトからの距離は約90マイル．山を越えなければならず，高速道路がない場所も多いので，毎日運転してくるのは大変である．そこで彼は上司と交渉して，火曜日から木曜日まで会社で働き，月曜日と金曜日は自宅で働くことを選んだ．火曜日の朝，彼は会社にやってくる．そして会社近くの友人の家に2泊して，木曜日の夜ペブルビーチに帰る．Bradはノート PCを常に携帯しているので，家でも仕事はできる．グループの方で月曜と金曜には会議をしないようにしているので，特に電話会議をする必要はない．毎週2日外泊するのは大変なことであるが，Bradにとっては週のうち4日間を海の見える美しい町で過ごすことが大切なのである．ちなみにゴルフ好きの読者には信じられないかもしれないが，Bradはペブルビーチに住みながらゴルフをしない．ただただ海と自然が好きなのである．

同じく研究所に勤めるCharlesは，ワシントン州シアトルに住んでいる．彼もまた自然を好み，その中で子供を育てたいと思い，妻の故郷のシアトルへの移住を決意した．長年東京に住んでからこちらに移住した筆者にしてみれば，シリコンバレーにも十分すぎるほどの自然があると思うのだが，ある種のアメリカ人にしてみるとそうではないらしい．ともあれ会社から840マイルも離れてしまうと，物理的に通勤することは不可能である．当然彼は週5日とも在宅勤務になる．Charlesは現在大規模データベースの仕事をしていて，何百台ものマシンを並列に動かしている．しかしそれらはすべて研究所にあり，彼の手元にあるのはPCが1台である．自宅からケーブルモデムでインターネットに接続し，VPNで会社のコンピュータにアクセスしている．ミーティングに参加するときはNet Meetingと電話会議を活用する．会社には年に数回来るだけであるが，日常の業務には特に問題はない．

上記3人は研究者であるが，事務職の人もいる．Dorothyは筆者が所属する組織のアドミンである．彼女は家庭の事情で遠距離通勤をしている．もともとシリコンバレーに住んでいたのだが，彼女の夫が失業してしまった．仕事を求めて家族がたどり着いたのはロサンゼルス近くのアナハイムであった．もちろんパロアルトまで通える距離ではない(約380マイル)．そこで彼女とその上司が採った方法は，遠距離勤務であった．彼女はHPのアナハイムオフィスに席を借り，パロアルトにある研究所のために働いている．物品の調達や出張予約など，アドミンが関係する業務の多くはオンライン化されている．我々もそれを使っているが，彼女の手が必要な場合（たとえば購入したPCの配達場所の確認など）は，メールでお願いする．すると彼女がメールや電話を駆使して手配してくれる．彼女は部門長のスケジュール管理もすべてメールで処理するし，組織のミーティングには電話で参加してくる．

ヒューレット・パッカード研究所
湯浅　敬　*kei.yuasa@hp.com*

英語の Telecommute を文字通り訳すと「遠距離通勤」となるが，これだと新幹線で通勤するようなものを思い浮かべる人が多いだろう．もちろんそれは正しいのだが，いわゆる在宅勤務も Telecommute に含まれる．むしろ最近はそちらの意味で使われることが多い．シリコンバレーでは不動産価格の高騰を理由に遠隔地から在宅勤務をする例が多い．ハイテク産業がしのぎを削るシリコンバレーでは，アメリカの他の地域に比べて個人所得が高いが，それに比例して不動産も高い．しかも近年のオフショアリングで IT 関係の仕事は減ったのに，なぜか不動産価格は上がり続けている．今の給料が良くても高いローンを組んで家を購入するのはリスクが高いのである．そこで仕事はこの地で得ても，住宅は土地の安いところに求め，勤務形態を工夫しようとする．どうせなら自然の中で暮らすという将来の夢を今実現してしまうことも可能になる．さらにこのシステムがうまくいくのなら，会社から離れたところにいる人を，最初から Telecommute を条件に雇用することもできる．そうなると会社と社員双方にとってよいことである．今では自宅から Telecommute することを前提に求職する人を支援するビジネスも生まれている．

在宅勤務には，PC とネットワークが必要不可欠である．アメリカでは電話のローカルコールはかなり昔から定額料金であった．そのため会社の近くに住んでいる人が，自宅から会社に繋げてメールを読むことは昔から行われていた．1980 年代半ばにディジタル通信用の基幹線として SONET (Synchronous Optical NETwork) が敷設され，1990 年代に電話線を利用した ADSL と CATV を使ったケーブルモデムの 2 つが登場し，遠くの家庭からでもインターネット経由で会社に接続できるようになった．帯域は ADSL が 1.5Mbps，ケーブルモデムが 3Mbps（ただし共有）程度である．さらに VPN を使うと帯域は 1Mbps 以下に落ちる．日本のものに比べると遅いが，それでもあまり不満に思わず使っている．もう 1 つの重要なツールは電話である．在宅の人を含めたミーティングは，電話会議システムと Net Meeting を組み合わせて行う．そのため研究者は電話用のヘッドセットを持たされているし，部署ごとにトールフリーで入れる電話会議システムの回線を持っている．この PC，ネットワーク，電話の 3 つが在宅勤務を支えるハードウェアである．

ソフトウェアとしては上司や同僚など周囲の人間の理解が必要となる．Charles の上司に聞くと「電話が Charles のアバターだから，本人がここにいなくても問題ないよ」と言う．同じことは Dorothy にも言える．筆者は Dorothy にはこの 2 年で 3 度ほどしか会ったことがないが，メールが彼女のアバターとして機能しているので不便を感じたことはない．まさにバーチャルアドミンである．これが可能なのは，本人と上司・同僚との信頼関係，そして会社と個人の間に job description という契約関係があるからといえるだろう．アメリカでは組織も個人も仕事が明確に定義される．研究職であれば，プログラム開発や特許や論文を書くこと，アドミンなら組織内の事務処理を円滑に行うことが仕事になる．社員は job description に沿って仕事をして，会社はその仕事に対して給料を払う．そこに書かれていない上司や同僚とのミーティングは，言ってみれば主たる仕事を行うための補助的な手段である．それならば，「補助的手段であるコミュニケーション」と「自分を快適な環境におくこと」のどちらが主たる仕事の遂行によい影響を及ぼせるのかという選択となる．その結果，自分のライフスタイルを追求した方が仕事もはかどる，本人にとっても会社にとってもメリットがあるということを上司と合意できれば，Telecommute は始められるのである．

日本は国土が狭いとはいえ，オフィスは東京や大阪などの大都市に集中しており，住宅地からのアクセスがよいとは言えない．多くのサラリーマンは通勤に 1 時間も 2 時間もかかる環境を強いられている．鉄道を増やせばよいのかも知れないが，通勤ラッシュ時間だけのために鉄道を増設するのは無駄なことであろう．一方通信インフラは長年アメリカに遅れをとっていたが，光ファイバや ADSL が出始めてからの普及は早かった．今や光なら 100Mbps，ADSL でも 50Mbps が当たり前である．アメリカの 10 倍以上の帯域が月々数千円で手に入る．VPN などのツールはたいした投資ではない．つまり，Telecommute をする理由もあれば，ハードも整っているのである．

問題は道具よりむしろソフトウェアすなわち日本の仕事文化であろう．日本人は直接会ってのコミュニケーションを好む傾向がある．仕事場には物理的な出勤が求められるし，会議のために毎週新幹線で東京–大阪間を出張する人も多い．Telecommute にはまず，個人の仕事を明確に定義してその人に任せることが出発点になる．次に会議などでは電話をコミュニケーションツールとして使いこなすことも不可欠である．どちらも日本人が不得意なことかも知れない．しかし，Telecommute は個人のライフスタイルだけでなく，社会のためにもなる．これが普及して通勤混雑が解消されれば，電車が無茶な過密ダイヤで運行することもない．クールビズなんてものを推進するより，ずっと省資源で環境にやさしい社会ができるであろう．

（平成 17 年 8 月 1 日受付）